

## 翻訳 訳すことのストラテジー

著者 マシュー・レイノルズ

訳者 秋草俊一郎

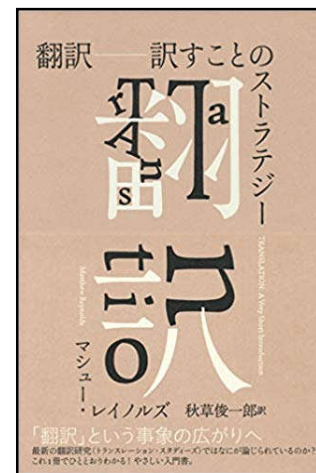
出版社 白水社

出版年 2019年

頁数 198 ページ

ISBN 978-4-560-09685-7

評者 北代美和子



世はグローバル化の時代である。東野治之はかつて「日本列島が自給自足の条件を豊かに備えていた」ことに注目し、「日本が本質的に持つ鎖国体質」を指摘した(『遣唐使』pp.189-90)が、その日本でさえ急激な労働人口減少に直面して、実質的な移民政策に舵を切らざるをえないところに追い込まれている。出入国管理及び難民認定法改正にともない、短期間に大量の外国人労働者が流入し、その多くが日本語による高度のコミュニケーションに困難を抱えていることが想定される。そこで「翻訳・通訳」の出番となるわけだ。しかし、現状では「翻訳・通訳」という行為についての認識と理解が社会全体で共有されているとはいえない。多くの人は、母語と外国語の2言語を話す人間ならだれでも両方向の翻訳・通訳が可能だと思いがちだし、通訳者を介しさえすれば自分の発言が外国語になって100パーセント伝えられると信じているだろう。このような誤解から生まれる齟齬を回避するためにも、一般社会の側に「翻訳・通訳」について一定のコンセンサスがあることが望ましいのではないだろうか？

その意味で、本書『翻訳 訳すことのストラテジー』のようなコンパクトな翻訳(学)の入門書が世に出されることは、翻訳学というひとつの *discipline* のみならず、社会全体にとっても有益だと思われる。翻訳学の入門書としてはジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』、鳥飼玖久美子編著『よくわかる通訳翻訳学』、モナ・ベイカー&ガブリエル・サルダーニャ編『翻訳研究のキーワード』などがあるが、いずれも大学、あるいは大学院レベルの教科書として編纂されており、一般の読者にはいささか手が出しにくいかもしれない。

本書の原書 *Translation: A Very Short Introduction* は、オックスフォード大学出版会が刊行する大学生以下を対象とした入門書シリーズ *Very Short Introductions* の1冊として2016年に刊行され、「翻訳」とは何か、「翻訳」とはどういう行為かを翻訳学の視点から平易な言葉で語っている。著者は『意味』と呼ばれるなにかをとりだして、『言語』と呼ばれるなにかから、『言語』と呼ばれる別のなにかへと移す *translation* を「厳密に定義された翻訳」(p.30)、「多種多様な伝達行為にまたがり、言語間のみならず、言語内をもつなぐ」広義の翻訳を「翻訳性(トランスレーショナリティ)」(p.36)と呼び、紀元前2世紀のアイトリア人大使パイネアスから現代ベンガル語作家のモハッシュェタ・デビまで、あるいは複

数の翻訳者の共同作業による古代中国の仏典漢訳から 21 世紀の多和田葉子の多言語創作まで、時代と地域を自由に行き来しながら、translation の全体像を提示する。17 世紀ジョン・ドライデンの「翻訳の三分法」が語られたかと思うと、1995 年にボスニア、クロアチア、セルビア間で交わされた Dayton 和平合意が言及され、聖書の翻訳から翻訳に対する検閲へと議論が展開される。本書がカバーする範囲は広く、扱うテーマは多岐にわたるが、テーマとテーマが緩い連関状につながれ、ひとつひとつに具体的な事例があげられて、初学者の理解を促すように工夫されている。私たちが自明の理と考えがちな概念に対し、ところどころで疑義を呈したうえで、新たな視点を提示する論旨の進め方もスマートだ。

本書の構成をざっと俯瞰すれば、まず大前提としての「翻訳」の定義があり(1 章、2 章)、そのあと英語の house とイタリア語の casa の違い、あるいは文脈で作られる意味など、翻訳の起点となる「意味」についての基本事項が説明される(3 章)。さらに「意味」に対する「形式」の翻訳として、『風の谷のナウシカ』における視覚的情報、あるいはダンテ『神曲』の terza lima と脚韻という音声的情報の翻訳がとりあげられる。前半の最後では、作家のアイデンティティを翻訳でどう扱うかを語りながら、シュライアーマハーの二分法を紹介し、翻訳と「解釈」の違いを例示する(4 章)。

後半では、政治や宗教の場における翻訳者の倫理と責任(5 章)、国際的な政治力の反映としての言語間の力関係から生じる文学・政治・報道の翻訳の(数的・質的な)偏り(6 章)、国家のアイデンティティと文学の翻訳の関係、多言語創作、翻訳を媒介とした文学的創造の革新の可能性などが論じられる(7 章)。ざっと見ただけでも、翻訳に関する情報がわずか 170 ページほどの本文のなかにぎっしりと詰め込まれていることがわかる。読者は興味を引いたテーマについて、著者が巻末にあげた欧米の文献一覧を手がかりにさらに知識を広げ、理解を深めることができる。また、訳者によるていねいな「解説」と「日本の読者むけの読書案内」が加えられ、日本語で読める文献、日本語で書かれた文献がピックアップされているのも日本の読者には親切である。

著者のマシュー・レイノルズはオックスフォード大学教授。大学の HP によれば、近現代(19～21 世紀)の文学、比較文学、英語、翻訳などを教えている。著書に *Poetry of Translation: From Chaucer & Petrarch to Homer & Logue* (2011)があり、詩の翻訳を研究対象のひとつとしているようである。本書でも詩的言語の翻訳にたびたび言及がなされる(もともと翻訳に関する欧米発の言説の多くが詩の翻訳、つまり「意味」と「形式」の翻訳について語っているわけで、定型詩の技術を発展させてこなかった日本人にとっては、そのことがたとえばヴァルター・ベンヤミンの『翻訳者の課題』やアントワーヌ・ベルマンの *Pour une critique des traductions: John Donne* などをいまひとつ腑に落ちないものにしてしているのかもしれない)。

ところで著者は冒頭で「翻訳」の 1 例として漢文訓読をあげ、漢文訓読は「ある言語の読者が、別の言語で書かれた文章がわかるようになる、中立地帯のようなものを生み出している」(p.11)とする。しかし、すべての翻訳は「中立地帯」を通過して形成されるのではないだろうか？ 豊臣秀吉や徳川家康の通訳をしたジョアン・ロドリゲスは *Arte Breve da Lingoa Iapoa* (1620)で、「日本人が中国語の文書や書物を Yomi[訓]のこぼで読む時は、ある語からべつの語へと跳んで前へ戻ったり、時にはあいだの数語を後まわしにして離れたところにある語を拾い出したりして、自分の読んでいるものの意味・内容を理解する。これはわれわれがラテン語文の語をたどる時と同じ」(池上岑夫訳『日本語小文典』(上)p.29)であると述べている。「同じ」だからと言って、ロドリゲスがラテン語

文を「訓読」と言うのはナンセンスだろう。漢文訓読を「訳」と見なしたのは荻生徂徠だが、徂徠の「訳」と英語の translation はひとつの同じことを表しているのかという疑問も湧く。訳者「解説」にあるように、漢文訓読は特異な「翻訳」として鉤括弧に入れておきたい気がする。このあたりをめぐっては、「翻訳学」が Translation Studies を「翻訳」した学問であることをあらためて考えざるをえなかった。

.....

【評者紹介】

北代美和子(Kitadai Miwako) 翻訳家。日本通訳翻訳学会理事。東京外国語大学講師。日本文藝家協会会員。上智大学大学院外国語学研究科修士課程修了。訳書に『名誉の戦場』『石に聴く』『嘘と魔法』など。

